

120周年を迎えた浜松測候所

八 木 晃*

浜松測候所は、平成14年11月16日に創立百二十周年を迎える。浜松測候所の自慢は、日本で最初の天気図に当所の気象観測値が掲載されており、この天気図が作られる4か月前の明治15年12月1日から観測業務が開始され、その観測データが現存していることである。

この機会に浜松測候所が立地する、浜松市とその周辺の状況と、当所の経てきた歴史の一端を紹介したい。

1. もの作りの町・浜松

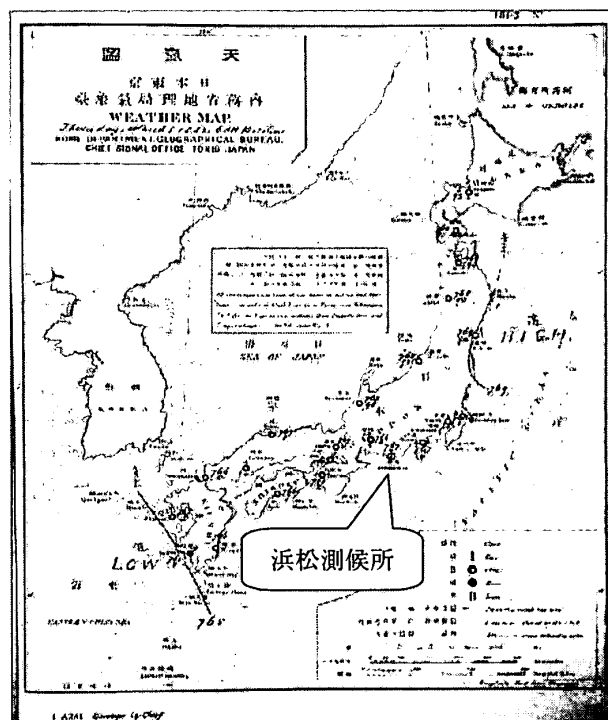
浜松市は、人口594,678人(2002年4月30日現在)を擁する全国第17位(2000年3月)の都市である。

静岡県の西部にあって東海道の要所に位置し、東に天竜川(流域面積5,090平方km、幹川の長さ213km)、西に浜名湖(面積65平方kmの塩水湖)に挟まれ、北は伊那山地、南は遠州灘に接しており、冬の空っ風が顕著なほかは、気候的にも恵まれて風光明媚な観光資源を持つ地としても有名である。

県内では現在、静岡市(来年度には清水市と合併する)より人口が多い浜松市ではあるが、特筆すべきは「物づくり・産業の町」であることだ。この伝統は、中世から引き継がれている遠州の織物産業が、明治時代に入って飛躍的な発展を遂げたことによるところが大きく、機織り・道具の開発・物づくりと続き、明治・大正時代の織物・機械産業から、昭和に入っては楽器・自動車・光電子産業へと発展しつづけている。

現在は、これらの産業の発展に付随して、外国から働きにきている人達も多く、外国人登録者数は2万名を超えている。

これらの地域の伝統を踏まえた、教育的な施設も駅のごく近くにあり、音と光ともの作りをテーマにしてその原理を伝えようとする浜松科学館や、世界の楽器を収集し、公立として日本最初の楽器博物館も一見の価値がある。



2. 測候所誕生から草創期

気象庁発行の「気象百年誌」によれば、明治14年12月28日に内務省地理局に採用されたドイツ人イルウエン・クニッピンが、翌年の明治15年2月に、暴風報告事業(原文のまま)の意義、既設の12か所の測候所に加えて必要とする8か所の測候所の位置と観測すべき項目、電信による気象電報のコード化(当時の電信料金は大変高価であった)等を含む綿密な計画書を明治政府に具申したとある。

このようにして新たに選ばれた浜松は、直轄測候所の1つとして、クニッピンの具申から9か月後の同年11月には国内で17番目の気象観測所として出発した。

浜松市史(大正15年10月5日浜松市発行)によれば、「明治15年浜松宿伝馬町電信局内に器械を据え、事務所を警察署内に設けたるを始めとし、高町(現在地に至近の位置)へ移転したるは16年なり。主管区域は駿河

* Akira YAGI, 浜松測候所。

© 2002 日本気象学会

安倍川以西及遠江一円とす」とある。

そして、浜松市史3(昭和49年3月12日浜松市発行)には「道路の向かい側の半僧坊(正副寺)境内に天気予報の標識柱を建て、明日の予報を発表した。四角形の布旗の白が晴れ、赤が曇り、青が雨で、下町(旧宿場町の地域)のどこからも見え、半僧坊の時の鐘とともに、測候所が大正13年8月鴨江町の長者平に移るまで長い間市民に親しまれた」と名実ともに直轄測候所として活躍していたことが記載されている。

その後、明治20年4月に県営に移管され、同時に気象報告は毎月印刷発行され、気象年報も翌21年から発行されている。

3. 発展と苦難の時代

大正時代に入ると、各種観測測器や計器類の整備も進み、日本における気象事業は次第に確立されていった。浜松における地震業務の幕開けは、大正2年に初めて簡単微動計が設置され、翌年の3月から観測が開始された。

このように業務が充実するとともに、従来の庁舎では手狭となり、大正13年8月には41年続いた高町から市内鴨江町へ移転した。創立から数えて42年目にして、独立した新しい庁舎での出発は、当時としては希望に満ちたできごとであっただろうと想像される。

その後、日本航空輸送会社による、東京～大阪～福岡間の定期旅客輸送が開始されることなどに伴い、昭和4年から航空気象観測を実施し、東京・大阪の飛行場へ通報するようになり、その翌年には測風気球による上層風観測が加わった。

昭和8年11月には、新しい業務として舞阪港に検潮所が新設された。この検潮所の新設に平行して、測候所の手により同年6月～昭和10年1月まで5回にわたって、浜名湖の海洋観測が実施され、この成果は「浜名湖海洋観測報告」として刊行され、湖水一帯の鰻・かき・のり等の養殖に利用された。この潮汐観測は、現在も津波・高潮・異常潮位などの防災に欠くべからざる資料となっている。

昭和14年には再び国営に移管され、これらと期を同じくして静岡測候所が開設されて、当所の所管区域は小笠郡以西の静岡県西部となった。

戦時色も濃くなった昭和16年になると気象報道管制が敷かれ、一般の利用者への気象情報は全て中止された。しかし、昭和17年12月には、気象専用線が設置され気象技術者が直接、気象電報の送受信を行えるよう

になった。

昭和20年4月30日と6月18日に浜松を襲った空襲は、浜松市内の全域を焼き尽くすほどの激しいものであり、庁舎や施設の全てを灰として、唯一地下壕に退避してあった気象原簿の一部が残ったのみである。

昭和19年12月7日13時35分ころ、熊野灘を震央とする東南海地震が発生し、御前崎で6、浜松で5の震度を記録し、静岡県西部で死者121人、全壊家屋2,712戸に達する大被害が生じた。当所でもかなりの損傷があったほか舞阪検潮所の建物・観測施設が破損した。

終戦を迎えて市内はほとんど廃墟と化し、昭和22年2月に現在地の浜松商業学校の跡地に、無線鉄塔を持つ現在のような庁舎が一年がかりで新築された。

昭和25年4月には東海気象同好会浜松支部(後に静岡県産業気象協会に発展)を結成し、月刊誌「空っ風」の発行を行い、遠州地区の気象と産業を結びつけた各種の調査研究が行われて、地域の学校関係者を集めての講習会や気象知識の普及活動が行われ、地場産業発展に貢献した事実が残されている。

先般、私は天竜市長さんにお会いする機会があり「昔、農業気象の講習会でお世話になりました・・・」と伺った。この会はその後昭和50年代まで続いた。

昭和44年には、浜松市と協力して300余ページの「静岡県遠州地方の気象」を発刊し、今でも遠州地方の気象を知るうえでの有効な資料として、防災関係機関や行政の各方面で利用されている。

4. そして今は

現在は、所長を含め8名の職員で、地上気象観測及び一般への気象解説業務を行い、静岡県西部のアメダス観測施設や地震観測施設と、舞阪町の検潮所など16か所の保守点検を行っている。

また、当所を取り巻く周辺には、アメダスの点在する観測点より至近の距離に、静岡県の農林水産部の農業試験場や水産試験場が運営されており、気象観測を継続しているので、定期的に集まり「気象の勉強会」を行い、技術者同士のデータや情報の交換を行っている。

そのほか浜松市には、航空自衛隊浜松基地があり、青森県三沢基地と2箇所のみで高層気象観測を行っている。職員が見学したりする交流を行っている。珍しい気象現象があったとき等には、データの提供を依頼し調査などに役立てていきたいと考えている。

今後は、当地方の防災関係機関や行政など地域の動

きをより迅速に把握し、スムーズに静岡地方気象台や上部機関へ伝え、気象業務に反映できるようにすると

共に、気象庁の情報を的確にわかり易く地域に伝える測候所として役立ちたいと願っている。



2002年武田賞フォーラムのご案内

(財)武田計測先端知財団は、「2002年武田賞フォーラム」を開催いたします。二年目の今回は、「生活者の選択に答えるテクノアントレプレナーシップと工学知」と題し、各受賞者の方々の講演と受賞者全員に参加頂くパネルディスカッションを予定しております。ぜひ、ご来臨賜りますようご案内申し上げます。

日 程：2002年11月20日（水）

会 場：東京全日空ホテル（港区赤坂1-12-33）

参加申込み：<http://www.takeda-foundation.jp/>

申込締切日：2002年11月13日（水）

【参加無料】

【プログラム】

「生活者の選択に答えるテクノアントレプレナーシップと工学知」

どんなに優れた業績でも生活者によって選択されなければ生活者の豊かさ、幸福には寄与しない。生活者による選択とは何か、2002年武田賞受賞者の業績に生活者の選択の意味を探る。

セッションA：情報・電子系応用分野

“青色発光デバイスの開発に懸けたテクノアントレプレナーシップ”

受賞者紹介講演

9：30～9：40 垂井康夫

（武田計測先端知財団常任理事）

講演

9：40～10：20 赤崎 勇（名城大学教授）

10：20～11：00 天野 浩（名城大学教授）

11：00～11：40 中村修二（カリフォルニア大学教授）

セッションB：生命系応用分野（逐次通訳付）

“ゲノムの新世界を探る工学知”

受賞者紹介講演

9：30～9：40 松原謙一

（武田計測先端知財団常任理事）

講演

9：40～10：40 スティーブン・フォダー

（アフィメトリクス社会長兼 CEO）

10：40～11：40 パトリック・ブラウン

（スタンフォード大学教授）

セッションC：環境系応用分野（同時通訳付）

“人工衛星搭載レーダが解き明かす地球環境”

受賞者紹介講演

9：30～9：40 鈴木基之

（武田計測先端知財団常任理事）

講演

9：40～10：20 チャールズ・エラチ

（米国ジェット推進研究所所長）

10：20～11：00 畚野信義

（国際電気通信基礎技術研究所（ATR）社長）

11：00～11：40 岡本謙一（大阪府立大学教授）

パネルディスカッション（同時通訳付）

13：00～15：00 パネルディスカッション

“生活者の選択に答えるテクノアントレプレナーシップと工学知”

司 会：西村吉雄（武田計測先端知財団理事）

パネリスト：受賞者全員（8名）

15：15～16：30 2002年武田賞・武田研究奨励賞授賞式

16：30～17：30 カクテルレセプション

●授賞式とカクテルレセプションには、どなたでもご自由にご参加いただけます。ぜひお越し下さい。

詳細は本財団ホームページをご覧ください。

お問い合わせ：財団法人武田計測先端知財団

津坂真理子 小坂真奈美

〒104-6591 東京都中央区明石町8-1

聖路加タワー32F 私書箱33号

Tel：03-3549-2781, Fax：03-3549-2787

E-mail：forum@takeda-foundation.jp